

ギュンター・グラスの講演「学ぶ教師」にみる文学的啓蒙

依岡隆晃

Die literarische Aufklärung in Günter Grass' Rede „Der  
lernende Lehrer“

Ryuji YORIOKA

言語文化研究 徳島大学総合科学部

ISSN 2433-345X

第26巻 別刷 2018年12月

Offprinted from *Journal of Language and Literature*

*The Faculty of Integrated Arts and Sciences*

*Tokushima University*

Volume XXVI, December 2018



ギュンター・グラスの講演「学ぶ教師」にみる文学的啓蒙

依岡隆晃

## Die literarische Aufklärung in Günter Grass' Rede „Der lernende Lehrer“

Ryuji YORIOKA

### Abstract

Günter Grass ist ein vielseitiger Schriftsteller. Seine Tätigkeiten bestehen aus politischer Einmischung, künstlerischer Aktivität und Filmproduktion u.s.w.. Aber diese Tätigkeiten sind keine sekundären, sondern sie spielen eine ergänzende Rolle für seine eigentliche Tätigkeit der Literatur.

Hier wird über die Beziehung zwischen seiner literarischen Tätigkeit und seinen anderen Aktivitäten nachgedacht, indem ich seine Rede wieder nachlese. Zugleich fasse ich den Begriff „Aufklärung“, den er oft in seinen Reden und Essays benutzt, ins Auge.

So wird hier in seiner Rede „Der lernende Lehrer“ (1999) gezeigt, wie sein Begriff „Aufklärung“ seine literarische Tätigkeit weiter entwickelt und ihre Originalität klar macht, und wie seine aufklärerische literarische Tätigkeit mit dem Lesen in Zusammenhang steht.

### 1 はじめに

ギュンター・グラスは多面的活動を展開してきた作家である。その活動は政治へのコミットメント、造形芸術活動、反核平和市民運動、出版社との協働、映画制作など多彩だった。とはいえ、それは文学の付け足しや作家の余技とし

てなされていたのではない。むしろ異分野との協働や、異なるディシプリンでの相互刺激が、本来の活動である文学に対して相補的な役割を果たしていたのである。むろん畑違いの複数の活動を展開することで、本業の文筆活動が疎かになるのではないかと、ことあるごとに問いかけられてきた。単なる気晴らしとして余技としてやっていたのなら、本業に差しさわりがでてきたら止めてしまうだろう。ところがグラスの場合は、それぞれの活動が継続されたばかりか、危機的状況にあつてむしろ積極的に展開されていた。

従来のグラス研究では作品論・作家論が中心で、こうした文学以外の活動との関連が十分に考察されてきたとはいえない。だがグラスを多面的な文学者として正当に評価しようとするからには、こうした他の活動と関連づけた研究は必要である。さらにはこのような研究を進めれば他の活動との対照において現代の文学のあり方を示すこともできるだろう。私自身は彼と日本の作家との対話研究で文化・国境を超えた文学交流を考察し、大江健三郎や小田実との対談に注目して国境・文化を超えた対話からグラスの文学のあり方を照らし出してきた。だがこれらの研究は文学という共通の土壌での比較研究だった。

一方、グラスの文学以外の活動についての研究は日本では少ない。かろうじて文学と異なるディシプリンとの影響関係研究で、拙論の「『ブリキの太鼓』の映画化について」<sup>1</sup>と「書くことと描くこと」<sup>2</sup>があるくらいである。これらで私は文学と映画、もしくは造形芸術との関係性が異分野交流研究として文学自体の存在意義を明らかにできることを指摘したが、いまだこのような観点でのグラス論は少ない。

本研究はそこで、グラスの文学とそれ以外の活動の関係をさらに追究して、あまり研究されていない講演をもとに考察する。従来こうした活動は文学研究では二次的とみなされ、補足的にしか取り上げられてこなかったが、文学自体の意義を浮き彫りにするには非文学的活動に注目しなければならないと考えるからだ。

たとえば文学と政治との違いについて、グラスは「作家」とは複数の現実を提示する存在として、一つの現実しか認めない権力者と対峙すると、エッセイ「さまざまなユートピアとの競争」(Wettlauf mit den Utopien, 1978)などで繰り返し述べている。歴史との違いについては「文学と歴史」(Literatur und

---

<sup>1</sup> 依岡隆児「『ブリキの太鼓』の映画化をめぐる～文学と映画のコラボレーション～」『RHODUS』Vol. 18、2002年

<sup>2</sup> 依岡隆児「書くことと描くこと～ギュンター・グラスと造形芸術～」『言語文化研究』Vol. 25、徳島大学総合科学部、2017年

Geschichte, 1999) で歴史が勝者のものであるのに対して、文学は敗者たちを描くと述べてもいた。科学技術や産業に対しては、さまざまな矛盾によって生き、時代遅れでパソコンがあっても効率化できない、ゆっくりしたプロセスを保持するものが文学とされる。さらに彼が積極的に関わったベルリン芸術アカデミーが1980年代に「啓蒙の悲惨」という連続講演を企画した際には、彼自身「理性の眠り」(Der Traum der Vernunft, 1984)と「いまだに啓蒙主義？」(Ist das noch Aufklärung?, 1985)という講演をして、啓蒙の影の部分にも言及して芸術・文学の側からあるべき啓蒙を考えることを提唱していた。このようにグラスの場合、異なる分野との対照から文学という活動の独自性が語られているのである。

それゆえ、ここでは文学内でだけでなく他分野・他専門(教育)との関連で、グラスの活動を見ることとする。その際、グラスの講演やエッセイでよく目にする「啓蒙」という概念に着目する。<sup>3</sup> グラスは自らヨーロッパ啓蒙主義の伝統に立つと公言してきたがゆえに、ここではこの「啓蒙」という点で文学と他分野とが接点を持ちうることを明らかにしたい。具体的には、講演「学ぶ教師」<sup>4</sup>を取り上げ、そこで論じている「啓蒙」からいかに文学活動が開かれたものとされていったか、また教育との関わりでいかに文学の独自性が照らし出されているか、さらにそれと関連してグラスにとって啓蒙的文学活動が読書という活動といかに密接に関連しているかということを中心に考察する。

## 2 「学ぶ教師」について

まずグラスの講演「学ぶ教師」について概説して、この講演が教育との関連

---

<sup>3</sup> グラスの啓蒙主義について正面から取り上げたものにハーロ・ツィンマーマンの『啓蒙主義の冒険』(Günter Grass, Haro Zimmerman: Vom Abenteuer der Aufklärung. Werkstattgespräche. Göttingen 1999.)がある。これはツィンマーマン自身が行ったグラスのインタビューをまとめ、それに彼が解説と論考を付けた本である。彼はここで彼の啓蒙活動はSPDの「理性と啓蒙」という伝統に賛同したことからきていることを指摘している。そして「深い懐疑」が機能不全に陥った従来の啓蒙自体にも向けられていたとする。また歴史からの逃避は啓蒙的理性を拒絶することになる(S. 298 f.)としている。このようにグラスの「啓蒙主義」へのこだわりが取り上げられているが、一方でそれが失敗に終わったものともみなしていた。

<sup>4</sup> Grass, Günter: Der lernende Lehrer. In: Für- und Widerworte. Göttingen (Steidl Verlag) 1999. 以下、FWと略する。

で彼の文学活動のあり方を示していたことを明らかにしておきたい。

「学ぶ教師」は、1999年5月13日、ベルリンのフリッツ・カルゼン校での総合学校会議に際しての講演で、教師たちを前になされたが、主として教育の問題を取り上げている。ちなみに刊行に際してこれは、息子のブルーノに捧げられている。ブルーノは学校の教師をしていて、父グラスとは正書法のことでは対立するものの、教育問題を議論する相手でもあった（FW, 32）。

グラスは総合学校に1960年代からすでに賛成していた。総合学校（Gesamtschule）とは初等学校から中等学校までの13年間一貫教育の学校で、ハウプトシューレとレアルシューレ、ギムナジウムを統合した統合型学校である。

「もちろん、私は総合学校に賛成する者です。六〇年代当時、ベルリンの教育委員長だったカール＝ハインツ・エーヴァースの熱心な改革に賛同してからずっと、私はそのために発言し続けてまいりました。総合学校からは硬直化した専門知識の打破と、同時に点数制度の廃止も期待されていました」（FW, 8）。

グラスはここではまず、学校と自分との関わりを、その生い立ちにまで遡り、早くから学校を終え、軍隊に取られたがゆえに、「私の先生は戦争だった」（FW, 8）として、以下のように述べる。

「たしかに私の苦悩に満ちていたとともに短期間に終わった学校の経験が、私を総合学校のモデルに基本的に賛成であること、つまりは、教育システムにおいて機会平等を社会的権利として促進することを私に強く求めるきっかけとなったのです。今日では、総合学校のこの機能と可能性は拡大されています。と申しますのも、その連帯に基礎を置く組織は、外国出身のたくさんの生徒に、引き続き教育を受ける道を開くからです」（FW, 10）。

グラスは自らの戦争時代の学校体験を引き合いに出して、そこから総合学校を機会均等促進という点で支持すると述べている。総合学校は早期に進路選択を強いられるドイツの教育制度の弊害を解消するとともに教育の機会均等に資するものと期待されていたが、総合学校では外国出身の子供たちにもこの機会均等が可能とされると主張している。自分の学校体験から作品の中の教師のモデルを、次に明らかにしていく。

「私の教師への文学的偏執は続いたのです。後に書いた小説や物語、『局部麻酔をかけられて』であれ、『蝸牛の日記から』であれ、そこでも教師たちは支配的役割を果たしてきました。『頭脳の出産』では、それどころか、教師カップルが登場して、このひどい世界で子供を作るべきかどうかわからないということにしています。しかし、ハルムとデルテはシュレーズヴィヒ＝ホルシュタイン出の戦後生まれで、彼らは社会的にリベラルな肥やしのおかげ

で、雑草のように生い茂ったいくつかの言葉を誤用するようになりました。一方、これとはまったく違う気質の教師が、体操教師マレンブラントと上級教師クローゼです。彼らの有無を言わせぬ頑固さのために、かつての生徒で今は騎士十字勲章を受けているマルケは挫折したのです。たしかに、今の小学校教師ならオスカル・マツェラートのような新入生が太鼓を叩いて反抗しても、シュポレンハウアー嬢とは違って、教育学的なウィットでそれに対応できたかもしれません。（中略）また、私のラテン語の先生だったドクトル・シュタハニックは、その厳しさのために生徒たちに脂汗をかかせたものですが、それとはまったく別の理由から私の記憶に残っています。彼は前ダンツィヒ中央党の議長として、ときどき職員室をシュトゥットホーフ強制収容所と取り替えなくてはなりません。そのため、私は小説『ひらめ』の中で彼のために記念碑を建てたのです。彼の不屈さは、もっと危険が少ない今日なら、確固とした沈黙によってではなくて大きな声で、学校当局に対して示されたに違いありません」（FW, 10-11）。

グラス自身、極めて偏った興味しか抱かず、学校では落第生だったが、このように学校に対して強いこだわりがあった。それゆえ彼は自分の作品の中に登場させた教師たちを挙げて、実在の教師たちがそれぞれグラスの作品のモデルとなっていったことを明らかにする。さらに学校教育は、結局、戦争の経験と重なり、その戦争経験は彼に同時代に対して「懐疑の原則」（FW, 13）を当てはめることを教えたという。

ここでシュポレンハウアーというのは、『ブリキの太鼓』の「時間割表」の章に出てくるオスカルの小学校の担任になる女性教師で、オスカルが教室で太鼓を叩くのを激怒してやめさせようとした。オスカルはそれに対して奇声を発して彼女の眼鏡のガラスを割ってしまい、この日を自分の学校生活の最初にして最後の日としてしまった。

ダンツィヒ三部作のこのシュポレンハウアーや、権威主義的な体操教師、『局部麻酔をかけられて』の高校教師シュテルテベーカー、『蝸牛の日記から』の「懐疑博士」、『頭脳の出産』の子供を生むかどうか迷いながらアジア旅行に出る高校教師夫婦ハルムとデルテが挙げられるが、グラスは特にこの「懐疑博士」とあだ名を付けられた教師を思い浮かべ、価値としての「懐疑」について考え直す（FW, 12）。

「私が聞こうとはしなかったこの高校第一級教諭はしかし、二十年後に私をそそのかし、『懐疑博士』と呼ばれるヘルマン・オットーという教師を文学的

遊戯の中にもたらしたのでした。それにとどまらず、いつでも信心が売りに出されたとしても、私が『懐疑の原則』を、あらゆる他の原則、『希望の原則』にもまさるものとするようになったのは、彼のおかげでもあるのです。

今日はこの講演を機に、私はさらに一步進めてここにお集まりの連邦(全国)総合学校の教師の皆様、基本的価値としての『懐疑の原則』をおすすめしたいと思います」(FW, 13)。

「懐疑博士」というのは、『局部麻酔をかけられて』に出てくる教師で、親ユダヤ的態度からナチスに追われ、自転車屋の地下にかくまわれた。彼のおかげでグラスは「懐疑」を自らの「原則」にすることができたという。だが、「懐疑の原則」は「原則的な価値」であるが、今や店ざらしになっている(FW, 13)。そのため、「所有の全体に対する義務」がないがしろにされ、脱税事件を招いているとする(FW, 14)。一方で、彼本人についても、

「私はただ今、自己懐疑のことをお話しし、またそれ故に自分のこともお話ししたいしました。私がこの講義のアウトラインをスケッチし始めてから、私はさまざまな理由からこの自分自身のポジションに関わる懐疑に自分がさらされていることを感じておりました」(FW, 16)。

と述べて、従来の自分の立場に対して「懐疑」を抱いていた例として、 Kosovo問題における空爆支持の意見表明に際して自分の今までの立場を見直してまで、特に難民のことを考えて、COSOボ介入に賛成した経緯を取り上げている(FW, 16 f.)。この空爆を支持したことについてはちなみに、グラスは晩年後悔していると述べている。<sup>5</sup>

またこの講演では学校における外国出身の子供との共生についても触れ、多文化共生社会にむけて総合学校がひとつのモデルであるとの見方も示している。教育の機会均等を実現しようとする総合学校は移民の子供たちの教育に取り組むことになるが、現場の教師たちは、多文化的になる現代において日夜子供たちによって「引き裂き検査 Zerreißprobe」(FW, 18)にさらされている。これは教育政策失政からの現場へのしわ寄せであるとグラスは言う。憲法が蔑ろにされず、経済優先の社会・政治がドグマへの懐疑や意見の違いに対してコンセンサスを作り、多文化共生と文化の豊かさを実現しようとしなくてはならない。グラスはこうした点からこの時代の教師たちに「同情する」と述べる(FW, 19)。外国生まれの異文化を背負った子供の増えるこれからの学校では、「学ぶ教師」

---

<sup>5</sup> Grass, Günter und Heinrich Detering: In letzter Zeit. Ein Gespräch im Herbst. Göttingen 2017, S. 123.



が前提とされる。そうした教師は生徒から異文化を学ぶ必要があるとする (FW, 25)。

「外国、たとえばペルシアとかナイジェリアの出身の生徒たちはきっと、教師が知らないこと、私たちのヨーロッパ中心的な学校の叡智によっては決して知り得ないようなことを知っていることでしょう。

学ぶ教師とは、したがって、生徒たちとともに学び、かつ彼らから学ぶ人と言うのです」 (FW, 25)。

この主張の裏付けとしてグラスは文学の領域からピカレスク文学を持ち出し、ヨーロッパの文学がこのアラブから入って来た文学形式によって豊かになったことを指摘している。ピカレスク文学はスペインに入ってからヨーロッパ文学へと発展したし、医学や代数学がアラブの学者から影響を受けたものだと知ること、脱ヨーロッパにも通じてゆくだらう。こうしたことを知ることで「定められた地点をあえて後にする」 (FW, 25) ことが、教師には求められているとグラスは結論づける。

この講演の最後では、1986年から87年にかけて妻とともにカルカットで半年間過ごしたときのことに触れる。このことについては、グラスは『舌を出す』 (Zunge zeigen, 1988) に詳しく書いているが、カルカット・ソーシャル・プロジェクトにおいて、バラモン出身の教師カップルがスラム街の「ゴミの学校 Müllschulen」で教えている。この「ゴミの学校」の生き生きとした精神が導入できるのは総合学校であるとして、グラスは総合学校の将来に期待をかける (FW, 35)。スラムにおける「生き延びる力」に圧倒されたグラスは、その「生き生きとした精神」のあるこの「ゴミの学校」からドイツの総合学校も学ぶべきだと主張して、この講演を閉じる (FW, 35)。

このように講演「学ぶ教師」をみると、グラスが教育という分野において総合学校の擁護という文脈のなかで、文学的観点から懐疑精神や内省、異質なものの寛容さという点で「啓蒙」の意味を提示していたことが明らかになるだろう。

### 3 グラスと啓蒙主義

ここでグラスが「啓蒙主義」を強調することに違和感を抱かれるかもしれない。アウシュビッツという啓蒙的文明が行き着いた一つの帰結に向き合わざるを得ない現代作家たちは「啓蒙」という概念を警戒し、文学史的に古臭い潮流として片隅に追いやってきたからだ。ではなぜグラスは啓蒙主義にこだわるの

だろうか。ここではグラスと啓蒙主義の関係についてあきらかにしたい。

グラスも関わったベルリン芸術アカデミーでは、1984年から85年にかけて連続講演「啓蒙の悲惨について」を開催し、核ミサイルや環境汚染、科学の暴走を生み出した近代啓蒙主義を芸術の側から捉えなおそうと試みた。ここでグラスも積極的に発言し、『女ねずみ』にもこのときの講演活動が影響を及ぼしていた。一方、この講演「学ぶ教師」でグラスは啓蒙主義の本質として「自己懷疑 Selbstzweifel」(FW, 16)を挙げている。むしろグラスは自分のことをヨーロッパ啓蒙主義の伝統に連なる者と称するが(FW, 29)、その啓蒙が「アウシュビッツ」によって疑問に付されたことも承知していたのである。

「これがヨーロッパ啓蒙主義の伝統です。ルソーやペスタロッチ、ヘルダー、フンボルトから、それはフリッツ・カルゼンやアドルフ・ライヒヴァインを経て、わがヘルムート・フォン・ヘンティッヒにまで続いています。啓蒙主義のこの流派を終わりにしようとする試みはたくさんありましたし、今もあります。ときには、単なる悪ふざけから、新しい迷信を基礎付けなくてはならないと主張することもあります。しかし、分別くさい啓蒙主義の効果を疑う理由もあります。その重大な理由を挙げてみましょう。

アウシュビッツは啓蒙された国のひとつである国で可能となったのではないのでしょうか？そして、この国の国民たちは近隣の国の人々から、そのような国民であるかのように見られてきたし、また啓蒙主義の意味において文明化された国民として通ってきたのではないのでしょうか？現代にまで及ぶ、すべての啓蒙的努力を根本的に疑問に付すものは、ドイツでなされた文明の解消通知だったのでないのでしょうか？」(FW, 29)。

ルソー、ペスタロッチ、ヘルダー、リヒテンベルクの末裔に自分が位置すると言う。さらに現代ではフォン・ヘンティッヒも啓蒙主義者であるとしている。ここではヨーロッパの啓蒙主義が抜本的に検証されるが、その最大の特徴は懷疑精神だった、とりわけ自分に対する懷疑が本来の啓蒙主義の根本だったとする。その延長線上でアウシュビッツというユダヤ人大虐殺はヨーロッパの啓蒙主義的努力を疑問に付すがゆえに、文明の解消通知だったと改めて述べる。したがって彼はパウル教会でのマルティン・ヴァルザーによる「アウシュビッツの道具化」からの正常化といった議論には組みしない(FW, 30)。また、ホロコーストの記念碑は「開かれた家」であるべきであり、歴史から目を背けるためのものではないとして(FW, 30)、今ここで徳目のカタログを改めて並べてみて、それらを啓蒙主義の道具である「懷疑」に照らしながら、現代の問題に取り組むことこそが大切なのだと述べる(FW, 33)。それは、時代の大きな

流れの中で押し流され、抑圧され忘れられてゆく小さな世界を、ときにマイナーな立場に立たされても積極的に再評価するという彼の発想にもつながる。

グラスはさらに、先述したように、コソボ問題のことも自己懷疑にさらされてきた例として取り上げる。

「この賛成に至るまでには、私は自分に確保されていると思ってきたポジションを放棄しなくてはなりませんでした。つらく重苦しいレッスンでした。私はさらに学ばなくてはなりませんでした」(FW, 32)。

コソボ問題は自分の与えられたポジションを後にして決断するという「つらく重苦しいレッスン」だったと言うが、これはコソボ問題への自分の態度にもこの懷疑精神は向けられているということでもある。同様にまた移民のいる学校では、教師も異文化を背負った移民の生徒たちと向き合い、自らの考え方や文化的価値観を問い直すことが求められているとする。

グラスは「作家のための妊娠ケア施設」(1975年)という講演では「無為Muße」の大切さを強調していたが<sup>6</sup>、一見するとこれは近代的な効率主義や目的志向、勤勉性の奨励といった啓蒙的徳目と相反するよう見える。しかしグラスは「学ぶ教師」でも「ゆっくり」の意義を無目的性、遊び、自分と向き合うための孤独を擁護し、複数性を認め自己相対化することであるとし、それこそが現代的な啓蒙主義なのだと考えていた。現代の効率主義や画一化主義といった近代的信条が社会の閉塞感と専門分化した科学の暴走と無思考性をもたらしたとすれば、現代ではそれらを相対化することこそが啓蒙になるというのだ。

グラスの文明自体への懷疑は、アドルノの命題「アウシュビッツの後に詩を書くことは野蛮である」に作家として答えようとするところから生まれた。アドルノとホルクハイマーは『啓蒙の弁証法』で啓蒙自体に野蛮さがあつたとした。啓蒙とは人間を自然の支配者にし、人間の自己保存を目指すものだ。ところがその啓蒙が自己喪失に向かい社会という第二の自然へ隷従し、内的自然の抑圧に至った。資本の万能化と社会の画一化が文化産業によって広められ、娯楽を媒介として消費者を支配し操るのだと、そこでは論じられていた。

基本的にはグラスもこれに沿った考え方をしていた。実際、グラスはアドルノの『ミニマ・モラリア』を愛読していた。文明に亀裂を生じさせてきたとはいえ、グラスは啓蒙を見捨てたのではなく、今一度取り上げ現代において新しい啓蒙を模索しようとしてきたのである。その延長線上で無為やスローなペー

---

<sup>6</sup> Grass, Günter: Ein Schwangerenheim für Schriftsteller. Rede zur Einführung des neuen Stadtschreibers in Bergen-Enklein. In: Grass, Günter: Der Schriftsteller als Zeitgenosse. München 1996, S. 139.

ス、異文化に学ぶことを啓発する。自分の慣れ親しんだ立場を後にするという自己変革の勇氣と自分を懐疑にさらすことを総合学校の先生に求め、生徒たちにもこの自己懐疑と政治的抵抗を望んでいる。

グラスの講演やエッセイではこうした彼一流の現代的啓蒙主義が繰り返し論じられ、様々なテーマのもとで展開されてきた。教育だけではなく政治、マイノリティ支援活動、反核平和運動、マスコミとの論争、出版社との協働作業などには、自ずと作家としての独自性が読み取れるはずだ。どんなテーマでどんな活動にコミットしていたとしてもグラスは物語を紡ぐ作家であるという自己定義をしたうえで活動している。いや、多彩な活動をしながら文学とはなにかを自らに問いかげざるを得なくなっていったのである。なぜなら畑違いの活動に首を突っ込んでいる以上、作家・文学者としての自覚が自ずと意識されるようになるからだ。

たとえば、1999年のノーベル文学賞受賞演説「続く…」では、啓蒙とは中世の幻想を理性によって解くことで、やがてそれは資本主義と社会主義を生み、前者はドグマ化し利益最大化をひたすら求め、後者は改良不能になってしまったとしている。そして、こうした状況に対して政治ではなく、文学にそのドグマを揺るがすことを期待すると述べている。<sup>7</sup> そのために文学に時間はあるのかとも問いかけ悲観的に未来を思い描くが、一方でその作業はまさにシーシュポスの神話のように終わりのない労役になるとも述べている。

このように、アウシュビッツの後に書く宿命を背負った現代の作家としてグラスは、従来の啓蒙自体を問い直す必要があった。そこでは、今まで啓蒙的とされてきたこととは異なる徳目として自己懐疑とその帰結としての政治的抵抗を挙げ、ゆっくりやること、無為性、目的遂行的で効率一辺倒な価値観からの解放、そして自分自身に向き合うということ。「啓蒙」であると説いていたのである。

#### 4 読書と啓蒙

次に、グラスはこの啓蒙のための重要な行為として読書を挙げているが、なぜ彼にとって読書が啓蒙と関わるのかをここでは明らかにしたい。講演「学ぶ教師」でグラスは自らの読書歴を以下のように披露している。

「私にとってためになった読書の経験をいくつか挙げましょう。ハインリヒ・ペスタロッチ、と申し上げても、どうかびっくりなさらないでください。

---

<sup>7</sup> Grass, Günter: Fortsetzung folgt ... Literatur und Geschichte. Göttingen 1999, S.45.

この不幸な人は、その教育学的な試みはその時代のさまざまな事情と自分自身の不十分さのために挫折しました。そして、同様にダンツィヒ・ラングフルの私の小学校は彼にちなんで名づけられていました。そのペスタロッチは、何冊か小説を書いています。『リーンハルトとゲルトルート』というすばらしい本では、運命によって小作をさせられている状況と、かたくなな心の管理人について語られています。熟練した会話と、それに加えてスイスの言葉の抑揚を取り入れた多彩な言葉で、この啓蒙主義者は隷属ということの強制的システムを微細に明らかにしています。彼は読者に共に苦しむことを許し、それでも読者の意識が目覚めているようにします。同じように、ヴォルテールもその『カンディード』で、さらにヨーロッパ啓蒙主義の作家を挙げれば、ディドロが『運命論者ジャックとその主人』で、ためになる喜びを私たちに与えてくれました」(FW, 21)。

このように、グラスの読書歴にはペスタロッチ、ヴォルテール、ディドロなど啓蒙主義の作家の作品が並んでいた。さらにドイツからは彼の思想的な支柱であるベーベルの名を挙げる。

「あるいは、たしかにフィクションではないとしても、一貫して語りの調子で書かれていて私の心を突き動かし、教えをもたらし、そう、19世紀に関して情報を与えてくれた本、アウグスト・ベーベルの自伝『わが生涯から』は、ドイツの労働運動の始まり、社会主義者の時代、そしてその直後始まる修正主義論争を叙述しています。この自伝のことを知らなければ、現代における社会的困窮や階級格差の再来、経済的グローバル支配の進行しつつある暗闇、そして社会民主主義者と緑の党の人々との間の、活気もあればイライラさせられもする争いを理解することはできないと私は言いたい」(FW, 23)。

社会民主主義者ベーベルのこの自伝については、発表当時ベストセラーとなった。『ブリキの太鼓』の冒頭にこの自伝との共通点も認められるが、グラスはベーベルのこの自伝を愛読していたので、それからの影響を作品の中に自然と取り入れていたものと思われる。

さらに最近の作品からはナドルニーの小説を取り上げている。

「最後に私は自分より若い世代に属する作家の、同様に重要になった本を称えたいと思います。シュテン・ナドルニーの小説『ゆっくりの発見』です。読んでいるうちに、私には次々と明らかになってきたことは、この注意深くのろのろと進行する物語は、世間一般でますます圧倒的に加速するスピードに対する解毒剤になりうるということでした。他のどこでも時間がこれほど目に見える

ように流れていることはありません。それゆえこの小説からは、その熟練さを傷つけることなく学校でも役に立つ『ゆっくりの学習』についての示唆を導き出すことができるでしょう。ナドルニーに触発されて、私はその上さらに一步進めて、すべての学校で、とりわけ総合学校で、『ゆっくりの学習』のコースを導入することを提案いたします。私にすれば、そのうえそれは仕事を行う上でのひとつの行程でもあります。ゆっくりであることは時間の流れに逆らっていく行程なのです。意識的に引き伸ばすことです。静止するまでにブレーキをかけられたテンポのことで。休むこと、無為であることを習うことです。現代の情報洪水の中では生徒たちにとって、耳にうるさい雑音が次々と連続する映像とかアクションなしに沈思するようにさせることほど、役にたつことはないでしょう。自分自身の音しか感じるものがない静けさの冒険の中に入っていくことほど有益なことはありません。もちろんわかっています、こうした提案を実現するには否応なく時間が不足しているということは。にもかかわらず、私は皆様に、この提案に微笑を向けるだけではなく、遊び半分でもまじめに受け止めていただきたいと思います。その甲斐はあるはずですから」(FW, 23)。

ナドルニーの『ゆっくりの発見』(Sten Nadolny: *Die Entdeckung der Langsamkeit. München und Zürich 1983.*)は、北極冒険家にしてタスマニア総督だったジョン・フランクリンの物語で、彼は幼少時代、自分の「ゆっくりさ」の特性に苦しんでいたが、おじのマシューの感化で、船乗りになることを決意する。トラファルガル海戦などにも巻き込まれ、北極探検で九死に一生を得た彼は、本を書きとぎの人となり、「サー」の称号も受ける。しかし、アヘン戦争への従軍を拒否し、タスマニアの総督に就任する。そこでさまざまな改革を断行するが、やがてその任も解かれてしまう。もう一度北極探検をする決意をし、自ら司令官として出発するが、途中、病に倒れてしまう。この作品は彼が生涯「ゆっくりを学ぶ」ことを自らに課し、人間は自分に与えられた速度で生きるべきであるということを経験するようになっていく点に焦点をあてて描いている。

このように、基本的にはヨーロッパの啓蒙主義文学が並ぶが、グラスがこうした傾向の作品を読んできたことは、彼の文学を考えるうえで重要である。ここで読書は単に有為であるかどうかという観点で評価されるものではなく、その意義は情報洪水の中で自分自身に静かに向き合う「静けさの冒険」にあると彼は主張している。現代社会の映像が氾濫しあふれる情報に取り囲われている子供たちにはこうした読書こそ有益であるとして、「ゆっくり」の学習を学校の科目として導入すべきだという提案までしている。

またグラスの他の講演や対話で読書について述べているものとしては、自らの有料選挙応援講演で得たお金で連邦軍及びその代替奉仕活動のための図書館を設立した彼がその連邦軍図書館の改革を提言する「兵士たちは何を読むのか」<sup>8</sup>（1969年）や、教育についてのインタビュー「朝から晩までドイツの教育学的妄想に向き合って」<sup>9</sup>（1980年）がある。また「読書する労働者」（1974年）ではグーテンベルク図書協会<sup>10</sup> 50周年記念講演で、労働者が読書するためにブッククラブの重要性を説き、自ら20冊の推薦図書を挙げている。「文学は強いられたイデオロギーの合意を疑問に付す。文学は邪魔し妨げとなる。文学は有用たろうとすることはできない。と言いますのも文学の有用性とは収益性とは矛盾するからです」と述べ、「文学は明るさが支配するところで暗さを示し、文学は暗いということによって啓蒙するのです」とする。<sup>11</sup>

カール＝ハインツ・エーヴァースとペーター・E. カルペとの対話「朝から晩までドイツの教育学的妄想に向き合って」では、グラスは学校での文学テキストの扱い方が文学を殺していると述べている。文学は本来美学規則に従うもので、多義的であるはずなのに、それが尊重されず一つの解釈に導かれるようにされているからだ。<sup>12</sup> それに対してグラスは自分が学校時代に詩を暗唱できるようになったことは有意義だったと述べ、文学を同時代から理解することを提唱し<sup>13</sup>、それは「乳牛はどれだけのミルクを出すか」<sup>14</sup> というような有益さという見方にはなじまないとする。

また本に向かい合うには集中力が求められるのに、教師にもこれが欠けている、「読書というのはクリエイティブで、自ら選択して行う孤独で素晴らしいプロセスであって、何物にも代えがたいのだ」<sup>15</sup> と述べている。物質主義的ですべてをお金に還元して有用性を導き出そうとする社会に対して、読書はそうではないあり方を示してくれるというのがグラスの考え方である。

---

<sup>8</sup> Grass, Günter: Was lesen die Soldaten? In: Grass, Der Schriftsteller als Zeitgenosse, a. a. O..

<sup>9</sup> Grass, Günter: Von morgens bis abends mit dem deutschen pädagogischen Wahn konfrontiert, ebd..

<sup>10</sup> 参考、竹岡健二『ブッククラブと民族主義』九州大学出版会、2017年

<sup>11</sup> Grass, Günter: Der lesende Arbeiter. Rede in Frankfurt/Main zum 50jährigen Bestehen der Büchergilde Gutenberg. In: Grass, Der Schriftsteller als Zeitgenosse, a. a. O., S. 132 f..

<sup>12</sup> Ebd., S. 182 f..

<sup>13</sup> Ebd., S. 184.

<sup>14</sup> Ebd., S. 184.

<sup>15</sup> Ebd., S. 186 f..

同様の主張は「学ぶ教師」にもみられる。

「もちろんそうした本を、たとえば、学校の授業でのように副次的なものに簡略化するのではないという限りにおいてですが。そうした授業では、私はこの本からどのような有用性を引き出せるのかとか、この本は私にどのくらいの儲けをもたらすのかとか、その牝牛は何リッターのミルクを出すのかといったモットーに基づいて、勝手に展開されています」（FW, 21）。

こうした考えは教育という分野において文学がいかに使われているかを指摘する際に述べられたものであるが、まさにこうした形で文学が現状の教育とは異なる原理として浮かび上がってくるのである。

また講演「読書する労働者」も文学の「有用性」が神学やイデオロギーのそれとは異なることを強調している。

「ひょっとしたら文学は（中略）いつも繰り返し、階級に特有で神学的でイデオロギー的に強いられたい合意を疑問に付すかもしれません。文学は邪魔をし、動揺させるのです。文学は役立つようにしようとはできません。というのも文学の有用性とは有用性の要請とは矛盾しているからです」。<sup>16</sup>

このように読書についてのグラスの講演を見てみると、彼が啓蒙主義の作品を読んできたことと、読書自体が「無為 Muße」とみなされるが他の専門や領域とは異なる「有用性」があるということを主張していたことがわかる。その「啓蒙」には、ドグマを懐疑的に見て、自らの批判的な懐疑精神を働かせて異なる世界観を提示し得るという点に特徴があったのだ。したがって、それこそがグラスが提唱する新しい「啓蒙」の徳目であり、彼がこれを実践するのに読書が適していると考えていたことは明らかであろう。

## 5 おわりに

以上、本論は文学と啓蒙の新しい結びつきを探り、啓蒙概念の現代的な意味を導き出すことを目的として、文学活動は文学自体ではなく他活動との関係性の中で捉えなおす必要があるのではないかという問題意識から、講演「学ぶ教師」においてグラスが「啓蒙」を通して文学の特性・意義を浮き彫りにしていたと論じてきた。そして、彼が新しい啓蒙として表面的な有用性を超えて自分自身と向き合うことや自己懐疑すること、時代の傾向を相対化するためときに無為のなかでゆっくり活動することを挙げ、その実践活動として読書を重視していたことを明らかにした。

<sup>16</sup> Grass, *Der lesende Arbeiter*, a. a. O., S. 132.



また本論でグラスの創作作品ではなく、講演に着目したのは、そうすることで彼の文学性を照らし出すことができるのではないかと考えたからだった。異なる分野や活動を通して初めて、文学の独自性は明らかにできる。これは文学の内輪の論争や論考からは決して見えてこないことであろう。

このように、本論はギンター・グラスの講演に即しつつ、彼の現代的啓蒙主義が文学活動を開かれたものとして展開させ、他の領域分野との関係性のなかで文学の独自性を明らかにしているということを主張した。その際に彼の文学以外の活動に着目したのは、その異質な活動を通して文学自体の独自性や意義を抽出しようとする意図があったからである。